カトリック高松教区報

2007年9月9日（第119号）
発行所 カトリック高松司教区 広報委員会
〒760-0074 高松市桜町1-8-9
TEL 087-831-6659 FAX 087-833-1484
Email
教区:tkcuria@mxi.netwave.or.jp
広報:tk-koho@mxi.netwave.or.jp
生涯養成:yosei@takamatsu.catholic.ne.jp
http://www.takamatsu.catholic.ne.jp/

UNITATEM SPIRITUS

更に協力宣教司牧を考える

高松教区の自立のために

高松教区長　溝部　脩

これで四回協力宣教司牧について書いています。それ程大事だと、わたしが思っているからです。単なる思いつきではなく、一つの方針として教区が打ち出しているからです。この方式を通して高松教区のあり方を探っているといってもよいでしょう。現在行っている地域はもちろん、まだ行われていない地域の教会にも口を酸っぱくして述べたいことは、協力宣教司牧は高松教区の基本的方針だということです。

「協力」というと、いかにも人間同士の助け合いという意味で捉えられがちです。その実、もっと教会的意味があるのです。第二バチカン公会議は、「教会―神の民」という考えを強く打ち出しました。ピラミッドのような教会の構造を見直して、もっと下からの力が発揮できる教会の姿を探っています。「司教―司祭―修道者―信徒」という縦の構図ではなく、洗礼を受けた信徒を土台に据えた神の民という姿を探っています。教会は司祭、修道者、信徒が協力してつくりあげていく「神の国」なのです。司祭一人に教会を任せてはいけません。同様に教会と関係のない修道者など存在しません。司祭に任せっきりの信徒は、自分のつとめを果たしていないと言ってもよいでしょう。

この協力関係をつくりあげるシステムとして、高松教区は「協力宣教司牧態勢」をとりました。これが絶対完全なものだと言っている訳ではありません。しかし、現在、未来の高松教区を考える時、これしかないと思えるからです。「一人の主任司祭―多くの信徒の群れ」が一つの小教区に集まり、共同体をつくるのが今までの常識でした。しかし、これはいつまで続けられるのでしょう。これを続けるために、別の所から司祭を呼べばよいというのでは高松教区は自立できません。今は高松教区にいる司祭、修道者、信徒が、どのような教会をここ四国につくりたいのかを、信仰をもって考える時なのです。問題は、これができるために、どうすれば協力態勢ができるかをまず考えることから始めてみることです。

８月１２日平和ミサにて（桜町教会）

主な記事

2～4面　委員会報告
3面　医療のともしび
4～6面　地区便り
7面　オリーブの島に高山右近像
8面　お知らせコーナー

はばたき

御存じマタイ福音書の「ぶどう園の労働者」のたとえ話・・・。そう、朝早くから働いた人と、夕刻になって働いた人に同じ賃金が支払われるという、なんとも不条理な話。▼私たちは、自分が正しいと信じていることに反対するものがいたら、それは間違っていると考える。しかしこのたとえ話は、正しいことの反対もまた正しいという別の価値観を提起している。つまり「与える側」と「与えられる側」の観点が異なるのである。▼私たちは長い間、「主任司祭制度」の庇護の下に甘んじてきた。常に「与えられる側」にあり、「与える側」の観点に立つ機会を持たなかった。しかし今、その観点を変える心の転換が求められている。▼協力宣教司牧態勢は、言うなれば「新しいぶどう酒は、新しい皮袋に入れる」私たち自身の回心のよすがでもある。当教区にとって本態勢の導入は幾分遅れたが、夕刻になって働いた人にも主は十分な恵みを下さるだろう。

委員会報告

愛媛地区規約発効 NICEを振り返って
第六回司祭評議会

教区事務局長　西川康廣

1　「愛媛地区宣教司牧評議会規約」が、司教承認を受け発行にこぎつけた。これを機に他地区の規約作成、更に小教区規約作成に弾みがつくと思われる。これらが整うと高松教区の方針である「協力宣教司牧態勢」に基づく、教区組織がほぼ完成することになり、聖霊による一致を目指す教区づくりが一層鮮明にしめされることになる。そこで規約作成に当たり重要なポイントを再確認した。

基本は次の通りである。

司教が地区長を任命し、議事運営は信徒が会長となってするが、決議は地区長が承認する。つまり地区長が、司教の前で責任を取るということになる。

2　日本の教会は、ＮＩＣＥ運動（福音宣教推進全国会議）から二〇年を振り返り、この推進運動を通して日本の教会は、トップダウン形式ではなく司教、司祭、修道者、信徒が一緒になって、これからの日本教会の福音宣教の在り方を考え、審議し、結論を出した。今その理念をどう生きているかを司教団は問うている。高松教区としては、司教団文書『ともに喜びをもって生きよう』を、各小教区・修道会に配布し、わたし達の教会はこう在りたいというビジョンを持って、それぞれの場で学び、深め合うことになった。

交流を深め信頼関係を築こう
諸宗教委員会

西川康廣

五月三〇日（水）午後三時～七時まで、第三回諸宗教者平和会議が立正佼成会において開かれた。参加者一〇名（内カトリック四名）で、会議構成は前半二時間が審議、そして後半は夕食を交えた懇親会だった。

第二回議事録から溝部司教により文章化されたまとめ文を基に、全員で目を通しながら「正義」「平和」「いのち」の項目ごとに意見交換をし、更にそれぞれの宗教でその表現がどのように理解し、また表現されてたかを学び合った。

これに関しては総論では一致できても、各論での一致に至るまでにはもう少し時間を要するというのが共通認識だった。しかし会を重ねることによって、互いに交流を深めることによって信頼関係を徐々に構築し、そこからすべてが始まるのではないかと思われる。またカトリック以外の関係者からの声として、いつかバチカン訪問実現へ向けて尽力願いたいと申し出があった。

次回第四回宗教者平和会議は、九月一九日（水）真宗興正派専光寺で開催することに決定した。

典礼委員会発足のその後
典礼委員会

濱口秀昭

昨年二月に発足した典礼委員会、当初は新しい『ミサ典礼書』が発行されることを期待して、その手引書づくりを計画した。しかし、その期待は得られず（ローマの認可が得られなかったので）計画は流れた。その後、「典礼を支える聖歌の指導を！」との要望に応えて三月に典礼音楽研修会を開いた。嘉松神父様と長崎教区典礼委員会のご指導を得て、一日、聖週間の典礼を学び、聖歌とオルガンの練習に励んだ（参加者約七〇名）。

この春には典礼委員六名のうち二名が教区外に転出し、典礼委員会はお休み状態が続いている。近いうちにメンバーを再構成し、皆様方の期待に応えたいと願っている。

平和旬間
～祈りで結ばれた高松教区～
人権を考える委員会

Srメリー・ギリス

今年の「平和旬間」は「祈りのリレー」「聖書における『平和』の意味」の講演会、「平和を祈るミサ」を通して普段よりも平和を意識した時を過ごしました。何よりもよかったと思ったのは祈りのリレーに対する皆様の取り組みでした。教区は平和旬間中、祈りで結ばれました。また一二日のミサの中で寄せられた意向を共同祈願の形で使わせていただきましたが、ちょうどその前日に聴いた講演を思い出しながら祈りました。

太田道子氏による講演はŠHM（シャロム）についてでした。聖書の中で使われている「シャロム」という言葉は単に「平和」という意味ではなく、もっと大きくとらえられていて、さまざまな意味を含んでいるということを強調しました。主に次の七つに分けられます。①「物事の完成、終了」②「欠けを満たす」③「状態の完全・充実・健康」④「祭儀関係」⑤「国際関係」⑥「契約関係」⑦「争い、災いの対語として」。下手すれば私たちが「平和」を考えた時、七番目の「争い、災いの対語として」と言う意味でしか使っていません。

創世記一に「神はお造りになったすべてのものを御覧になった。見よ、それは極めてよかった」とありますが、それは神様の望むシャロムなのです。「すべては良い」という状態は神様の望みです。神と私の関係（契約）によって、私とあなたの関係が生まれてくるということです。すなわち、私たちは、神がお造りになったすべてのものを良いと認めて、平和と正義に満ちた態度で人と係わる使命をいただいている仲間（盟友）だということでした。

皆さんから寄せられた意向はその同じ精神を表していたのは本当に素晴らしいと思いました。「平和」、「一致」、「豊かな実り」「幸福」「癒し」を祈るものでした。

一二日のミサの中で溝部司教は日本の各地で殉教者となった方々の生き方

（死に方）についてお話になりました。彼等は無抵抗（非暴力）の態度で賛美と祈りのうちに、仲間（司祭と信徒、信徒同士、親と子供）同志互いに励ましながら殉教への道を行進しました。それは強い信仰から生まれる確信が殉教者の力と勇気になりました。

神様と洗礼によって結ばれた私たちはSHMに含まれている「元通りの形」に改善するために努める使命をいただいています。ですから現代社会の抱えている問題を無視してはいけないのです。そのためにどうしても深い確信から生まれる力と勇気が必要です。どの小さなことでもいいのですから、シャロム（平和）のために働く人になりましょう。

徳島で会いましょう！
シンポジウム　殉教者ディオゴ結城了雪神父の生涯
生涯養成委員会

Srメリー・ギリス

いよいよ九月一五日（土）「徳島県郷土文化会館」に於いて四国四県の教会の皆さんと徳島県民の方々と一緒に『殉教者ディオゴ結城了雪神父の生涯』を称える行事が行われます。多くの方々が参加なさるよう心から祈っています。新聞などの報道機関を通して溝部司教が強調なさるように、殉教者の生き方は現代に生きる私たちに大切なメッセージを伝えるものです。共に体験できるこの行事を通して、二一世紀の教会に生きる私たちにとって共有できる確信が新たに生まれ、教区目標である「宣教」への熱意に繋がっていくのではないでしょうか。

結城了雪神父の生涯を振り返ってみましょう。

『一五七四年阿波国で生まれた結城了雪は、一二歳の時に大阪のセミナリオに入学した。一五九五年にイエズス会に入会し、日本では天草河内浦の修練院と引き続きコレジョで養成された。一六〇一年数人の日本人と共にマカオに留学し、倫理神学を学んだ。一六〇四年に帰国したが、彼は、ラテン語に関して特別な才能を持っていたので、有馬のセミナリオでラテン語の講師になった。修道士の身分の間ラテン語を教えただけではなく、京都に派遣（一六〇七年）、阿波で布教（一六〇八年）、長崎に派遣（一六一二年）の日々を過ごして、一六一三年長崎で副助祭に叙階された。しかし、そのころ再びキリシタンに対する禁教令が出されたために、結城修道士を含むたくさんの聖職者や信者がマニラへ追放されたが、一六一五年ディオゴ結城了雪はその地で司祭叙階の日を迎えた。その翌年密かに帰国し、殉教する日（一六三六年二月）まで二〇年間、死を覚悟しながら宣教と司牧に専念した。ディオゴ結城神父は徳島県の大坂峠で捕らえられ、大阪で穴吊りの刑をうけて殉教した。』

今一七世紀の日本の教会を支えてくださった一人の神父の生涯を簡単に振り返りましたが、書きながら私は自問自答しました。「宣教」の使命に呼ばれている私は同様に命懸けで励んでいるだろうかという問いです。二一世紀は一七世紀と違う問題を抱えているが、結城神父たちが命懸けで宣べ伝えた福音（Ｇｏｏｄ　Ｎｅｗｓ）は変わらないのです。イエスも命懸けでその福音を宣べ伝え、真の幸福への道を教えてくださいました。洗礼によってイエスと深く結ばれたものとして、その福音をできるだけ多くの人に分かち合いましょう。

ディオゴ結城了雪神父と日本の殉教者の取り次ぎを願って。

医療のともしび（5）
聖マルチン病院誕生の摂理
～一人の人でも救われる為に～

１９４５年７月の夜、高松市は米軍の空襲により焼野が原となった。その時、香川県に唯一つしかなかったカトリック高松教会の聖堂とすべては炎上した。マカリオ神父様、サンタ・マリア神父様は炎の中を坂出に住む信徒、鎌田亀次郎氏宅に逃げた。戦争末期の坂出警察は２人の外人神父様を「神はただ一つ！」と言って天皇を拝むのを拒んだ為、留置場に入れた。２週間後、滝宮に移し、間もなく終戦の８月１５日を迎えた。その夜２人は何の説明もなく釈放された。坂出は以上のように２人の神父様の受難によって清められ、神様の摂理は、働き始めていた。

１９４７年頃より、鎌田亀次郎氏と坂出市横津町薬局店主末沢藤太氏は、「敗戦後の失望、無気力から地域の人々を救い出そう。その為に坂出市にカトリック教会を設立しよう」と話し合い、時の坂出市長鎌田正光氏とサンタ・マリア神父の賛同を得た。正光氏よりは（同家所有）笠山山麓の畑千坪の寄贈を受けた。

教会はその半分を地域の人々と教会に役立つ事業をするようにと聖ドミニコ宣教修道女会に分与した。修道会は感謝していただき１９４９年春病院建築に取り掛り、秋完成した。１２月８日聖母無原罪のおんやどりの祝日を待って開院した。（木造２階建て、ベッド数２６床・内科・外科・呼吸器科）であった。その時の修道会総長ベゴニア・アギレは５００年前ペルーのリマで貧しい人々と病人、苦しむ人々に生涯を捧げたドミニコ会黒人修道士聖マルチンの保護を願って聖マルチン病院と命名した。又総長は「一人の人でも救われるために行きなさい！」と坂出に出発するシスターたちを励ました。

その「一人の人でも救われるために」は今も、病院の存在目的として職員の理念となっている。

坂出聖マルチン病院　Ｓｒ．イサベル　曽我部恵美子

種を育てること
青年の集い六月一六～一七日 in「屋島少年自然の家」
青少年委員会

中島町教会　森本みすず

少人数ならではのアットホームな雰囲気で始まった高松教区青年の集い。街中から離れた、屋島少年自然の家の自然豊かな情景が、いるだけで心を洗ってくれるようでした。

今回のテーマは『タレント』。しかし、溝部司教様は『タレント』について詳しく話されなく、私も疲れていてその後の分かち合いでも考えがまとまらずにいました。

それでも、司教様のお話の中で心に残った言葉がありました。

『聞くことがないと、実りがない』と『相手をよくみる』の二つです。最近私は、読書感覚で聖書を読んでいます。その中で心に残っていた『種蒔く人のたとえ』を司教様がたまたまお話になったのでそれも心に残りました。

これらの心に残る言葉たちは、集いから帰ってから後にいろいろ考えさせられる種となりました。『種蒔く人のたとえ』では、今の私を的確にあらわしている言葉があります。『種は神の言葉である。～～石地のものとは御言葉を聞くと喜んで受け入れるが、根がないので、しばらくは信じても試練に遭うと身を引いてしまう人たちのことである。』これは『聞くことがないと、実りがない』の言葉に似ていると思いました。

私は今まで幾つもの集いに参加し、さまざまな人と交流し信仰を分かち合い、何か得たような気で帰って来ていましたが、この言葉の意味を考えるうちに、実は何も得ていないのではないかと思ってきました。

参加者勢ぞろい

大なり小なり試練に遭うと、私は見てみぬフリをしたり自分を見失いがちでした。それを繰り返しているうちに、得たという発見や思想といったものがどんどん薄れていくようでした。まさに実りのない状態です。

さて、もう一つの『相手をよくみる』という言葉ですが、私はとりあえず『相手のなかに自分をみる』ことだと解釈しました。

私は最近、また生きることの試練に遭いました。その時の自分を振り返ると、今の私にあるささやかな信仰も偽りのように感じます。『相手のなかに自分をみる』ということは、例えば、人が人を裁こうとするとき、その罪は自分のなかにもあるということを認め、また許すことだと思いました。

二日目の日曜の朝私たちは、朝日照らす浜辺に出て、めいめいが場所をみつけ黙想をしました。それぞれの心にある問題は十人十色だと思いますが、同じ集いで分かち合えた種を活かすことができたなら、この集いは本当に意味のあるものになるのだろうと振り返って思うのです。

地区だより

家族的な教会・回心の道を歩き続ける教会を目指して

八幡浜教会　山本真也

八幡浜教会は愛媛県の南予にあるとても小さな教会です。日曜日のミサには二〇人くらいの信者が集まります。

六月には、毎年恒例の宇和島教会との合同親睦会を行いました。宇和島教会で一緒にミサを捧げ、やすらぎの里という施設で昼食、レクリエーションをし、親睦を深めました。とても楽しいひと時でした。

聖堂でイグナチオ神父様を囲んで

八幡浜教会は、家族的な教会を目指しています。一人ひとりは罪人であり、欠点もあり、問題もありますが、キリストの助けにより、お互いに受け入れあい、認め合い、赦し合うことができます。フィリピンの人たちも何人かミサに参加します。キリストは、国を超えてお互いが受け入れあう恵も与えてくださいました。日々、キリストに向かって回心の道を歩み続ける教会でありたいと思います。

山上の教会などに深く感動
ヨルダン、イスラエルへの巡礼

鳴門教会　高砂陽子

さる六月一〇日から二週間、一三名は、シルバー神父様を団長に、聖地巡礼へと旅立った。

ゆく先々での出会いは、驚きの連続であったが、特に印象に残ったものを記したい。

まず、モーゼ終焉地であるヨルダンのネボ山へ登り、モーゼの行けなかった約束の地を眺望し、山上の教会でミサに授かれたことや、世界遺産ペトラ遺跡の壮大さと岸壁彫刻の荘厳なる美しさに、又シクという大いなる岩の裂け目の通路の凄さ等に深い感動を覚えた。

聖地にて

そしてさまざまな人の祈りに満ちたエルサレムへ入城した時の僅かの緊張は、深い歴史ある行った先々の教会で授かった厳かなるミサに心洗われてゆき、落ち着きをもたらさせてくれた。

殊に、早朝の聖墳墓教会でのミサ聖祭やゲッセマネの聖堂でのミサの祈りは甚だしく心に沁みるものがあった。何はともあれ、全員が、つつがなく旅を了えることができ、それぞれに多くの恵みをいただいた日々を神に感謝。

日焼けして巡礼の旅果てにけり

神様の祝福を肌で感じさせてくれた
サレジオ志願生の歌

番町教会　河合　恵

私がサレジオ志願生のみなさんに会うのは二度目ですが、今回は司教館で彼らと共に一泊することもでき、彼らと交流を深めることが出来ました。一緒に食べたうどんと鰹のタタキがいつもよりさらに美味しく、楽しい一時を過ごしました。

次の日ミサのリハーサルをしている時から聖堂の中は彼らの美しい歌声で満たされていて、ミサが始まると、いつもなら、なかなか聴けないギターやその他の楽器を使って演奏する賛美歌がとても新鮮で、心に染み渡りました。

ミサが終わった後の演奏会では、とても心が癒され、神様の祝福を体いっぱいに浴びている彼らの歌声は、私に神様の祝福を肌で感じさせてくれました。

さらに今回は毎週桜町教会で練習されている方たちの歌も聴くことができ、音楽の素晴らしさ、音楽が持つ強いエネルギーさが分かりました。

また、去年と同じようにサレジオ志願生のインタビューでは、それぞれの道をきちんと決めて、それにまっすぐ進んでいる彼らをみて、私と年が変わらないのに自分の目標を持っているのにとても驚きました。

7月15、16日昨年に続き来高

一緒に過ごす時間はとても短かったですが、その中でサレジオ志願院の皆さんからたくさん教わった事がありました。

今回のように触れ合える機会はとても少ないので、一回一回の出会いを大切にしたいと思います。

平和を願い一歩前へ進むために
広島平和行進

今年の広島平和行事のテーマは「ともに学び　行動し　祈ろう　～そして一歩前へ～」このテーマのもと全国から平和を願い、ともに一歩前に進もうと思う人たちが八月五日、広島に集まりました。高松教区からも溝部司教様を先頭に約八〇名で参加しました。

平和行進での高松教区グループ

溝部司教様は当日の平和祈願ミサで「行進は人生の旅を象徴している。殉教者の行進の行き着く所は処刑場だったが旅の終わりに神の国、天国があると信じての行進だった」と説かれました。

広島の平和公園から平和祈念聖堂までの「カトリック平和行進」は一人一人に何をもたらしてくれたでしょうか。

映画「アンゼラスの鐘」上映会　7月14日伊予市

世界に呼びかけ平和を願いたい

郡中教会　種植博子

高松で見たこの映画を、愛媛の人たちに見てもらいたい、見せたいという思いで、三月に松山、道後、郡中の人達で実行委員会が発足しました。始めは松山で、と思っていましたが、伊予市に決定したので地理的なこともあり、入館者と収支が気になりました。そのうえ、上映当日には、大型台風が四国に上陸するというおまけまでついてきたのです。それでもスタッフたちは、雨の中、駐車場案内とか、かさの袋渡しとか笑顔で応対しました。みんなの願いが神様に通じたのか、台風のコースが少しそれて、午前、午後とも人の動きが多いときには小雨だったことは何よりでした。お陰で、遠くからも多くの方が来て下さり、予定が雨のために中止になったので来てくれる人もいて、当日券がかなり売れたことは嬉しい誤算でした。

アメリカ人の父を持つ小学生二人の母親は、ぜひこの映画を見せたいといってきてくださいました。家庭でも世界の戦争がなくなるようにという話をよくしていたらしいです。子供は、この映画を見て、『お父さんの国が、あんな怖い原爆を落としたの？』といって、凄く苦しんだそうです。またわたしの５歳の孫は、『ママ、戦争はもうないのね！原爆はもう落ちないのね！』としつこく聞きただすそうです。

戦争を知っている人も知らない子供も、もう二度とこのような悲惨な思いをすることのないように、世界に呼びかけ平和を願いたいと思います。この上映会の収益をこのような趣旨の元、協力してくださった教育委員会へ、平和についての本を寄贈しました。また一部新潟地震の災害見舞金とさせていただきました。

原爆の悲惨さを再認識

聖カタリナ女子高等学校　看護科２年生

今まで、原爆の話を何度も耳にし、小学６年生のときには、広島の記念公園に行き、原爆の悲惨さを見ました。

しかし、今回映画で見た原爆直後の長崎は、想像をはるかに超えていました。「もしわたしがあの時代の人々のうちの一人だったら一」と考えると、怖くてたまりませんでした。彼らのように強く生きることができただろうか。自分の家族より先に患者を助けることが出来ただろうか。私には無理だったと思います。

街が焼け、人が焼け、さらに生き残った人でさえ、放射線が原因の病気にかかり死んでいく。これほど怖いものはないと思いました。

いまだ世界の各地で争っている国々の中に今後、原爆が落とされるようなことがないよう、世界で一つの被爆地の日本にいる私たちが、世界に向けて原爆の怖さ、平和の大切さを伝える役割を担っているのだと思います。

溝部司教講演会「殉教者の霊性」

松山教会&江の口教会

殉教者とのつながりを意識

松山教会　楢林建司

六月二四日、溝部司教様を松山教会へお迎えして、「殉教者の霊性」をテーマとした愛媛地区対象の講演会が行われました。決定から実施までの期間が短かったのですが、松山地区からのみならず、新居浜や宇和島からの参加者を含め、約一六〇名が集まりました。

ご講話の前半は、「どのような視点で列福候補者の選定が行われたか」についてでした。現代日本に対するメッセージとして、信徒、特に女性や子どもや障害者の殉教者に光を当てるよう考慮されたとのことでした。また、候補者とならなかった殉教者のすばらしさにも言及されました。後半では、数名の殉教者が具体的に取りあげられ、その生き方死に方の現代的意義が、ていねいに説明されました。殉教者と我々の「つながり」を意識することができました。前後半の間には、司教様がお呼びになった、若い音楽家ご夫妻によるアトラクションが入り、やさしい音色の演奏と美しく澄んだ歌声に、皆が聞き惚れていました。

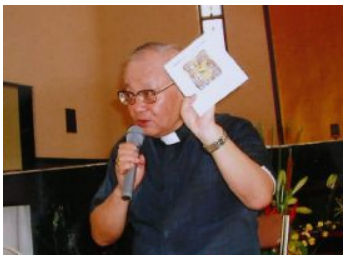
全体として、神の愛が心に染み渡る集いになりました。司教様をはじめ、ご尽力くださった皆様に感謝致します。九月に徳島で開かれるシンポジウムも楽しみです。

松山アトラクションの様子

今を生きる私たちの問題は？

江の口教会　岩本多恵子

七月二一日、二二日の両日、溝部司教様をお迎えして、「殉教者の霊性」と題するお話を伺いました。かねてより、司教様を中心とする、日本の殉教者列福特別調査委員会の強い、熱い働きかけにより、ペトロ岐部神父と一八七名の殉教者の列福がバチカンに於いてやっと認められたこと、しみじみと喜ばしく、またずっしりと重く感じられました。司教様のお話の中、まことに多くの殉教者が存在する中で、選ぶことの困難をお話になられた。四万人とも推察できる殉教者がいる中で一八人を選ぶという困難を体験くださったこと。歴史の中でキリストの精神を、命を賭して貫き続けた多くの殉教者の遺産を、今の私たちの命そのものの中にいただき、どう線として繋いでいけるのだろうか。棄教を迫られるという厳しい状況にない今を生きる私たちの問題として、切迫していないが故の、散漫な信仰でよしとしての日々に流されていく危険を感じます。信仰は全ての選択の基であるにも拘わらずです。司教様のお話を伺いながら、ある言葉が思い出されました。歴史小説の最終章「その人の名は知らず」。第二次世界大戦後、中国での日本人、中国人共に平和、自由を得るために戦った後の、無名の死者への鎮魂の一節でした。確かに名もなき多くの殉教が人類の歴史に残した遺産は大きいのです。問題は、続く者がどう受け止めるかだと思います。



江の口教会での講演

手作りのごミサで祝う

トーマス・マヘル神父様金祝によせて

中村教会　山中憲子

六月一〇日に中村教会で、トーマス・マヘル神父様の叙階五〇周年金祝を開催いたしました。その際には、遠く北海道や九州から来られた方を含め二〇〇名余りの方々に、四国の果ての小さな神の家に集って頂きました。聖堂に入れない方が半数近く居られましたが、ミサが始まると、皆祭壇に向かい、ミサに与っていました。

このミサは、案内状から会場作り、司会、お料理と中村教会の信徒が国籍に関係なく助け合って、それぞれが出来ることを一つ一つ積み重ねて作り上げた、まさに手作りのミサでした。素人の集まりですので、プロの方のように完璧とは行かなかったと思いますが、中村教会信徒が「おもてなしの心」をもってお迎えいたしましたので、その心は十分に出席していただいた方々に届いたと思っています。

また、この気取らない家庭的な雰囲気は、トーマス神父様のお人柄から出た、中村教会の特色であり、その点ではそのままの中村教会を通して、現在のトーマス神父様と信徒である私達の絆を見て頂けたものと思っています。

ご出席頂いた方々は、神父様、シスター、信徒の方々はもちろんの事、カトリック関係以外の方々も多くいらっしゃいました。ここにも神父様の五〇年間のご活躍の片鱗を見ることが出来ました。

トーマス神父様は、その一ヶ月ほど前に過労から肺炎で寝込まれ、その後も通院して点滴を受ける日々が続いていましたので、金祝が行えるか不安に思っていましたが、神様はトーマス神父様の五〇年間をちゃんとご覧になっていらっしゃいました。お体は順調に回復に向かい、当日は、すっかりお元気になっていらっしゃいました。また、天候にも恵まれ、滞りなく金祝を行うことが出来ました。

トーマス神父様には、これからも近くの温泉プールで歩きながら健康を保ち、私達中村教会信徒一同をお導きいただけるように願っています。

最後になりましたが、この度の金祝にご出席してくださった皆様、また、出席できずそれぞれの場所でお祈りを捧げて下さった皆様に、心より感謝申し上げます。

高松朝祷会五〇〇回を祝って

桜町教会　米澤南美子

去る六月二二日、高松桜町教会において大阪からの全国連合会長や松山朝祷会有志の参加を得て、記念の集いがあり、五〇余名のキリスト者が参加。奨励者としてカンバラ神父が、キリ

スト者が心を一つにして祈ることの大切さを、ヨハネ一七章をもとに強調された。

後半の愛餐会には他行事を終えた溝部司教も出席され、ご挨拶された。

第二バチカン公会議の実りの一つであるエキュメニカル活動。その代表的なものとして「朝祷会」がある。

日本ではすでに五〇年前から大阪でプロテスタント各派が、合同の祈祷会を始めていたのでカトリックもこれに加わり、朝祷会が発足した。今では全国にこの祈りの輪が広がっている。四国では、松山が一九六〇年に最初に発足。高松は一九七二年故田中英吉司教の呼びかけで三月に発足し、この六月で五〇〇回となった次第である。

高松朝祷会は、毎月第三水曜の六時半からカトリックとプロテスタントが交代で会場を提供している。時宜にかなったテーマで祷友の熱心な祈りが捧げられたあと、簡単な朝食を共にしながら交わりのときを持っている。

戦後六〇年。今、憲法を変えようとする動きがある。二〇条では信教の自由が脅かされようとしている。この動きに対しすべてのキリスト者が心を一つにして祈り、国是に立ち向かっていかなければならない時である。（溝部司教の「国是」と迫害・参照）

中央と比べて高松教区におけるこれらの取り組みは、プロテスタントに大きく先んじられている。統一教会やエホバの証人の対策セミナーなども・・・。今後、これらの活動をプロテスタントと共にするために各小教区で「朝祷会」や「キリスト教一致祈祷週間」の発足が強く望まれる。

ボーイスカウト活動を通し青少年の健全な育成を

坂出第四団

坂出教会　小野雅之

今夏、世界ボーイスカウト生誕一〇〇周年を記念して、イギリスで開催される第二一回世界スカウトジャンボリーに代表として、坂出からは一名派遣されるそうです。

日本ボーイスカウト坂出第四団の設立は約三八年ほど前で、団員は約四〇名からのスタートだったそうです。社会への奉仕、福音宣教のもとに青少年の健全な育成のためにカトリック信者であるかないかは問わず、何をしたらよいかとの問いに答えてボーイスカウトを発足しようということで、以来これまで坂出教会は積極的に育成、支援を行っております。

坂出第四団は現在六七名、団委員、育成会員を除きますと四一名の団員数であります。現在の悩みは世相に洩れず、少子化による参加者の減少であります。「参加してくれる仲間がたくさん集まってくれたら、より広く、より活発に活動できて楽しくなります。」と、代表の方が仰られました。

ボーイスカウトのモットーは「そなえよつねに」、スローガンは「日日の善行」のもとに、かわいいビーバー隊をはじめ団員達は学びあい、励ましあい、分かちあいながら、明るく生き生きと活動しております。

みなさん、これからも応援よろしくお願いします。

オリーブの島に高山右近像

オリーブの島の教会、カトリック小豆島教会の庭に設置された「高山右近像」の祝別式が、七月一日、溝部司教様によって行われました。このご像、以前は大阪教区玉造教会に置かれていたのですが、時の風雪に耐える中で、色あせ傷みもあり、元の設置場所から移動されていたものが、高山右近顕彰会の方々の目に止まり、大阪の大司教様は、右近顕彰会から強い要請を受け、どこかよい受け入れ場所はないかと探していた？ところ、小豆島は高山右近が小西行長にかくまわれ、しばらくの間居住していたゆかりの場所と、白羽の矢を立てられたのでしょう。

しかし、島の信徒たちは、昨年の暮れ近くまでは、顕彰会の熱烈なラブコールにもかかわらず、小さく少人数の貧しい教会にとっては　いささか荷が重いと、みな困惑気味でいたのです。

しかし新年に入り、顕彰会から「受け入れ感謝」の便りなど届き、そうこうしている間の五月に、「右近像」は海を渡り小豆島に上陸したのです。

それは、島の教会の事情を知った上での顕彰会と大阪教区の手厚い思いが込められ　立派に美しく修復された「高山右近像」だったのです。

教会の庭に設置されたご像を仰ぎ眺め、信者たちはみな、その姿に感激しました。

「七月一日に司教様の公式訪問と共に右近像の祝別式」と告げられ、少ない信徒たちは三週間で濱口秀昭担当神父様と相談、検討の上、計画をねり、必要なものは皆が助け合い手作りで準備しました。

当日、「右近像祝別式」後は溝部司教様のお話、お御堂には椅子が司教様を囲むように祭壇にまでぎっしり並べられ一杯でした。遠く高槻など大阪教区の方々、主には香川協力宣教司牧のブロック教会の方々などでした。お話の締めには聖歌「ガリラヤの風薫る丘で」が「オリーブの風薫る島で」に歌詞が変えられ小豆島教会信徒会長によって朗々と歌われ拍手喝采でした。

懇親会での出し物は、女性たちの奮闘によるお茶菓子代わりの小豆島特産の手延べ素麺を氷水で冷たくして供するおもてなしが好評を得ました。

おりしも、バチカンより一八八名の殉教者の列福が認められた時期に、次に列福運動が始まる「高山右近」のご像が、私たちの小さな教会の庭に設置されたことは島の教会にとって意味あることだと思います。私たちの祈りの上に右近様の祈りと、ご像を訪れてくださる方々の祈りが加えられることは小豆島教会にとって力強く嬉しいことです。

小豆島教会　髙橋佐和子

オリーブの　島にゆかりの　右近像

春蘭（小豆島教会　松本初枝）

～池長大阪大司教からの手紙～

２００７年８月２日

各教区司教様
本部事務局長様

大阪大司教　池長　潤

＋キリストの平和！

暑中お見舞い申し上げます。

さて、本教区における阪神・淡路大震災よりの復興計画は、２００７年５月２６日に行われました、たかとり教会の献堂式・竣工式をもちましてすべて完了いたしました。教会の再建は地域の復興がなされた後にしようと言ってきましたので、震災から１２年半が経過してしてしまいました。

思い起こせば、その節は司教様をはじめ貴教区のすべての方々にたいへんお世話になりました。ここに改めて深くお礼申し上げたいと思います。本教区の教区報『大阪カトリック時報』８月号に報告書を掲載いたしました。本来は貴教区の司祭・修道者・信徒の皆様に感謝とともにお送りしなければならないとは承知しておりますが、それも叶いません。

（中略）

また、こちらにいらっしゃる機会がありましたら、ちょっと足を伸ばして、新しくなった３教会（神戸の住吉教会・神戸中央教会・たかとり教会）をご覧になって下さい。

これからが夏本番です。時節柄どうぞ御身ご大切に。

とりあえずはお礼までに。

讃岐の殉教者 アントニオ 石原孫右衛門父子像 建立

献堂五〇周年を迎えた桜町教会に殉教者の像が完成し、八月一五日聖母被昇天祭のミサに先立ち、溝部司教により、除幕式・祝別式が執り行われた。

一六一七年六月一四日に現在の高松市で殉教したアントニオ石原孫右衛門と翌一五日僅か四才で殉教した息子フランシスコの石像で、地元の殉教者を顕彰するため信徒会が建立を計画、信徒のドミニコ安部重竹氏が二年間をかけ彫刻したもの（原型は安部氏の御尊父故ステファノ安部政義氏）。

今後は郷土史家等と連携し、さらに殉教者についての理解を深めていく。

主な司教日程

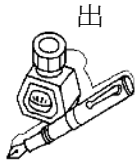
９月４日（火）　司祭評議会
５日（水）　大阪教区司祭研修会
８日（土）　連合幼稚園研修会
10日（月）～14日（金）　男子パウロ会黙想会指導
15日（土）　教区民の日（徳島）
16日（日）　青年連絡協議会（多治見）
19日（水）　諸宗教対話
20日（木）～21日（金）　神学校委員会（東京）
23日（日）　正平協全国大会（広島）
10月２日（火）　司祭評議会
５日（金）　臨時司教会議
７日（日）　新居浜教会堅信式
21日（日）　ソロモン司教叙階式
24日（水）～27日（土）　ＦＡＢＣ総会（タイ）

お知らせコーナー

編集後記

八月一日～二日はカトリック四国会館の大掃除が行われました。ここを使用している事務、各種委員会、神父様方、そして司教様も…「この二日間どっか出張がないかな～と願ったけど」と冗談を言われながら戸棚や机を動かして、床にワックスを掛けて、真夏の暑さの中で、みんなどろどろになって働きました。

綺麗になった会館で一一九号は出来上がりました。



投稿記事募集

【テーマ】
いじめなど少年を取りまく事件・事故

【投稿要領】
字数は３００字以内（写真歓迎）
「所属教会名、住所、氏名」明記のこと。
中傷・誹謗はご遠慮下さい。
原稿はできるだけメールで送って下さい。
写真もデジカメで撮影したものはメールで送って下さい。

【投稿先】
メール：tk-koho@mxi.netwave.or.jp
郵　便：〒760-0074
高松市桜町１丁目８－９
カトリック高松司教区広報担当
ＴＥＬ：087-831-6659
ＦＡＸ：087-833-1484